

多摩川中流域の水環境を題材としたプログラム 開発と市民による学校支援体制システムの研究

2006年

杉山 典子
調布市環境学習サポーター

目 次

はじめに	1
1. 調査研究の目的	1
2. 調査活動	2
3. 活動範囲	2
4. 組織	2
5. 活動状況	3
① 勉強会の実施	3
② 学校別の環境学習支援	5
③ ネットワークと協力体制づくり	11
6. 学習プログラムづくり	12
7. まとめ	14
8. 最後に	14
写真集—サポート活動の様子—	16
参考文献	25

課題『多摩川中流域の水環境を題材としたプログラム開発と市民による学校支援体制システムの研究』

はじめに

上記課題について、2年間活動を進めてきたことをまとめた。活動内容を整理し、出来るだけ分かりやすくまとめるようにしたが、慣れない報告書作りで拙い文章の報告になったことをお詫びする。

1. 調査・研究の目的

平成14年度より新しい学習指導要領が摘要され、「総合的な学習の時間」が実施されるようになった。この「総合的な学習の時間」では、「生きる力」の育成を目指し、地域や学校、子どもたちの実態に応じ、学校が創意工夫を生かして特色ある教育活動が行える時間としている。またその内容としては国際理解、環境、福祉、情報などこれまでの教育をまたがるような課題に関する学習を行える時間とし、子どもたちが総合的に学ぶことを目指したものとなっている。この時間を特色あるものにしていくためには、地域と学校の連携が不可欠であるといえる。地域の特色に応じたプログラムを作成し、授業のプログラムの中に取り込まれることによって、充実した「総合的な学習の時間」が実施されるはずであると考えた。

そのためには、地域のことを良く知っている市民が、地域の資産を取り入れた形でのプログラムの開発が必要となる。

調布市では、平成14年度より「総合的な学習の時間」に対応するために、地域の自然環境を素材とした学習を支援する学習プログラムの作成、教材の作成、人材の育成などを目的に「総合的な学習の時間に対応する地域プログラム等作成事業」を市民メンバーを中心に立ち上げた。学校のアンケート調査を行い、学校が「総合的な学習の時間」に何を求めているかを調べ、市民メンバーが実際に学校の現場に関わり、学校が地域には何を期待しているかなど情報収集を行ったりした。

これらの活動に関わった市民が、その後も学校の支援を継続的に実施していくことを目的に「調布の自然学習ボランティア」という活動グループを作った。

多摩川中流域に位置する調布市は多摩川をはじめ、支流の野川や仙川が市内

を流れ、湧水が 30 箇所以上で確認でき、市内の水道水の約 60% を地下水で賄うなど水環境が豊かである。また国分寺崖線、府中崖線は雑木林などが今なお見られ、都市近郊としては豊かな緑地環境を有している。

このような環境の調布市内をフィールドとして、私たちグループメンバーが、小・中学校の総合的な学習の時間への支援の実践を通じて、多摩川中流域の水環境を題材とした学習プログラムの開発・発展と学校支援のシステムの構築を行うことを研究の目的とした。

2. 調査・活動期間

2004 年 4 月 1 日より 2006 年 3 月 31 日

3. 活動範囲

調布市および近隣の多摩川流域と野川流域。

4. 組織

『調布の自然学習ボランティア』グループ

杉山 典子	総括
北谷 里香子	補佐・事務局
飯島 伸一	
武内 克彦	
山室 一樹	
中島 忍	

* 他に、「調布の自然学習ボランティア」メンバー
上垣起一、岡本浩史、木村武子、千葉秀子、中田育子、成田純男、森田育美

5. 活動状況

本研究は①勉強会の実施②学校別の環境学習支援③ネットワークと協力体制づくりの3つの活動を柱に活動を実施した。

①勉強会の実施

ア. 実施状況

【2004年度】

* 第一回「安全講習」 5月10日

講師 調布災害時ボランティアコーディネーター 伊藤晴夫氏

野外での怪我に対応できるように、三角巾を使った応急手当の方法について学んだ。額・頭頂・腕・手の平・足裏・膝・足首捻挫・腕の骨折などの手当て法で、実践的なことが学べた。

* 第二回「調布を知る」－調布の人と自然環境の関わりの歴史－12月6日

講師 調布市環境保全課長 小豆畑耕一氏

調布の地形的特徴、土地利用、武蔵野の雑木林と里山、湧水を利用した里の生活、動物の生息状況、これからの雑木林など調布の自然環境について系統立てて話されたので、よく理解することができた。

* 第三回「サポーターとしての大切な心構え」 12月13日

講師 多摩川センター理事 倉持武彦氏

学校支援のサポートをする時にまず必要なり、物を伝える－伝え方、伝える時の注意点、リーダーとして一服装、立ち位置など具体的な話を分かりやすく話され、座学の後は多摩川に行き、活動場所としてふさわしい所や、河原の石を使った学習方法など実践的なことも学び、とても役に立った。

* 第四回「環境学習の素材を知る・活かし方・伝える技術」 1月21日

講師 府中青年の家職員 北見社会教育主事

伝える技術－まず子どもたちに会ってどれだけインパクトを与えられるか、学習を始める前の最初が大事。素材を知る－実際に青年の家から、多摩川まで歩き、注意箇所・学習素材となりそうなこと・ものなどを各自で書きながら歩き、それらを皆で発表しあい確認する作業などを行った。活かし方－素材を知り、経験を重ね工夫する。日常的に子どもたちに接している経験からの話はとても説得力があり、私たちの活動の組み立てを考える上で非常に役立った。

＊第五回「多摩川で鳥の観察」2月28日

講師 多摩川センター事務局長 内田哲夫氏

野外での鳥の観察方法を、多摩川で実践。双眼鏡や望遠鏡の使い方だけでなく、調査表や地図の活用法、図鑑の使い方なども学んだ。21種類の鳥を確認できた。

＊第六回「雑木林で鳥の観察」3月14日

講師 多摩川センター事務局長 内田哲夫氏

鳥の観察の2回目。雑木林の鳥類観察をテーマとする時の留意点や観察、識別などを学んだ。雑木林は鳥の姿が見つけにくいので、地鳴きや囀りを頼りに探すことも学ぶ。14種類の鳥を確認した。

【2005年度】

＊第一回「野外でのハチの見分け方」－多摩川で－ 5月19日

講師 調布の自然学習ボランティアメンバー 山室一樹氏

多摩川に子どもたちを連れて行くと、ハチの姿を見ることが多いので、
①野外でハチのような虫に出会った時、その虫がハチかハチに似た虫か、ハチだとしたら危険な種類かどうか、識別できるようになる。
②ハチの暮らしを知り、ハチを理解することによって、無闇に怖がることなく付き合えるようになる。
③野外での観察用具の使い方の習熟、標本の作り方の習得。
④環境学習の素材として、昆虫をテーマにした総合学習への展開を考える。
以上の項目について学んだ。

＊第二回「多摩川の石を調べる」 1月20日

講師 寺島靖夫氏

午前は室内で、様々な石がどのようにしてできたかなどの説明を聞き、午後には多摩川に出掛けて、実際に河原の石を調べた。－河原の石のしらべ方－「多摩川の石」を参考書にして、色々な石を集めて、種類を確認。地震で地層がずれて固まり石になった珍しい物も見つけた。

＊第三回「水辺の楽校から環境学習サポート」 3月17日

－多摩川とどろき水辺の楽校の活動を聞く－

講師 とどろき水辺の楽校代表幹事 鈴木真智子氏

水辺の楽校の活動を続ける中で、多摩川近くの小・中学校から総合学習で多

摩川をテーマにするので、協力依頼が増えてきた。魚・水生生物・植物・水質・野鳥・多摩川などテーマは多彩。しかし水辺の楽校でできた人のネットワークがあるので、対応できる。水辺の楽校を作る時はとても苦労したが、人のネットワークを上手に作っていけば、うまくいく。

イ. 課題

1. 安全確保

学校側が求めることの一つに児童の安全確保がある。救急講習を行ったが今後、救命や救助についても講習を受け資格なども持つことで、学校も安心して市民の支援を受けることができるようになると思う。

2. 知識や技術の習得

私たちが行う学習支援はボランティアなもので、専門性の高いゲストティチャーとは別のものである。しかし調布市の自然環境などについて、より深く知識を習得しておくことは必要であり、またその環境素材を使ってどんな学習が可能かなど常に新しいことを考えていく必要がある。その意味において、今後幅広い人の繋がりを作り、定期的な勉強会の開催が必要と考える。

当初の計画では、学校の先生にも呼びかける予定であったが、時間の設定が難しくメンバーだけになってしまった。年1回でも先生方も交えた勉強会の開催を考えていきたい。

3. 子どもたちを惹きつけること

私たちの学習支援は、学校の先生と違って勉強を教える必要はなく子どもたちの活動の手助けをすることが基本であるが、子どもたちにいかに楽しさ・面白さを伝えるか、技術が必要とを感じる。子どもたちと触れ合う回数を増やすことで取得できる部分もあるが、皆で子どもたちをいかに惹きつけるか常に研究することも必要である。

②学校別の環境学習支援

ア. 実施状況

2ヵ年で調布市の小学校5校、42回のサポートを行った。詳細は次のとおり。

【2004年度】

調布市立富士見台小学校 2年生(68名) 多摩川学習(生活科)

- ・ 4月30日(金) 3,4校時
「よもぎを摘もう」サポート8名+調布市環境保全課3名
- ・ 5月21日(金) 3,4校時
「虫取りと草花あそび」サポート11名

- ・ 6月11日（金）3,4校時
「虫を捕まえよう」サポート8名
 - ・ 7月9日（金）3,4校時
「虫取りと草花の絵を描こう」8名
 - ・ 9月17日（金）3,4校時
「虫取りと草花あそび」サポート7名
 - ・ 10月15日（金）3,4校時
「虫取りと草花あそび」サポート7名
 - ・ 11月19日（金）3,4校時
「くつつく実や草、赤い実をさがそう」サポート8名
- ＊ 前年の1年生の担任が持ち上がりとなったので、内容も先生と相談しながら時期に合った活動の組み立てができた。
- ＊ 2年目なので、子どもたちの顔と名前が分かるようになって活動がしやすかった。また子どもたちも私たちの名前を覚えて色々話しかけてきて楽しそうだったのが、嬉しかった。

調布市立調和小学校 4年生（74名）野川学習（総合的な学習の時間）

- ・ 6月18日（金）5,6校時
「野川ってどんな川？」サポート6名 講師1名
 - ・ 6月29日（火）5,6校時
「テーマを決めよう」サポート5名 講師1名
 - ・ 7月26日（月）夏休み中 児童13名
「野川源流見学会」サポート6名
- ＊ 年度初めの話し合いでは、3学期まで継続した活動をすることになってい
かが、先生が忙しくほとんど打ち合わせができないまま、連絡が途絶え1
学期だけのサポートとなってしまった。
- ＊ 野川が水枯れして、先生もやる気を失くした様だったが「なぜ水が無いの
か？」など学習テーマは考えられたのに、中途半端に終わってしまったこ
とが残念だった。

調布市立布田小学校 1年生（86名）多摩川学習（生活科）

- ・ 7月13日（火）1,2校時
「虫取りと草花あそび」サポート6名
 - ・ 9月30日（木）3,4校時
「虫取りと草花あそび」サポート6名
- ＊1年生なので、まず安全確保に注意を払った。先生がグループごとに帽子の色

を変えてくれたので、サポートが自分のグループの子をすぐ確認できてとてもよいアイデアだと思った。

調布市立滝坂小学校 3年生(67名) 深大寺用水(総合的な学習の時間)

- ・ 11月25日(木) 1,2校時
「滝坂の昔を学ぶ」-深大寺用水・崖線・植物など サポート4名
* 実施日の直前の依頼だったため、サポート人数が十分確保できなかった。
* 単発でのサポートは、子どもたちに十分情報を伝えきれず難しいと感じた。

調布市教員研修会 環境教育部会メンバー 16名

- ・ 6月9日(水) 14:45~16:00

「多摩川を素材にどんな学習ができるか？」

サポート7名 調布市環境保全課2名 講師1名

- * 多摩川で実際に手網の使い方、水質検査の方法、アシ笛の作り方などの説明をし、学校に戻ってから先生方と話し合いの場を持った。
- * 私たちの活動についての質問も多く、また先生方の悩みなども聞かせてもらい、有意義な時間を持つことができた。

【2005年度】

調布市立富士見台小学校 4年生(56名) 多摩川学習(総合的な学習の時間)

- ・ 5月11日(水) 3,4校時
「ふしぎ発見!野草パーティーをしよう」 サポート9名
- ・ 6月21日(火) 3,4校時
「水質検査とストーンアートに挑戦」 サポート8名
- ・ 7月12日(火) 3,4校時
「川に入ろう」 サポート6名 講師1名
- ・ 9月20日(木) 3,4校時
「虫をさがそう」 サポート7名
- ・ 10月21日(金) 1~5校時
「野川公園へ行こう」 サポート5名
- ・ 2月7日(火) 3,4校時
「鳥を観察しよう」 サポート5名 講師2名
- ・ 2月24日(金) 3,4校時
「テーマごとで楽しもうー石・魚・鳥」 サポート6名

- ・ 3月22日(水) 1,2校時
「多摩川学習発表会」 5名で見学
 - * 先生がしっかりと活動イメージを持っていて、毎回必ず打ち合わせと終了後の情報交換・見取りを行ったので、充実した活動ができた。
 - * 多摩川だけでなく野川での活動も行ったので、比較ができ子どもたちは楽しかったようだ。
 - * 7月に多摩川に入り魚取りをした時は大変だったが、保護者が安全確保の手伝いをしてくれて助かった。私たちの活動を保護者に見てもらうことができ、理解を得られたこともよかった。

調布市立富士見台小学校 1年生(65名) 多摩川学習(生活科)

- ・ 9月9日(金) 3,4校時
「虫をつかまえよう」 サポート8名
- ・ 11月2日(水) 3,4校時
「草花あそびをしよう」 サポート6名

調布市立調和小学校 4年生(75名) 野川学習(総合的な学習の時間)

- ・ 5月17日(火) 5,6校時
「野川を知る」 サポート5名
- ・ 6月10日(金) 5,6校時
「野川に入る」一高谷橋付近 サポート6名
- ・ 6月24日(金) 5,6校時
「野川に入る」一車橋付近 サポート5名
- ・ 7月13日(水) 1,2校時
「野川に入る」一中島橋付近 サポート6名
- ・ 9月16日(金) 5,6校時
「野川に入る」一糟嶺橋付近 サポート6名
- ・ 10月7日(金) 5,6校時
「野川に入る」一細田橋付近 サポート5名
- ・ 11月9日(水) 1~4校時
「野川公園に行く」 サポート5名
- ・ 12月20日(火) 1~4校時
「兵庫島に行く」一多摩川との合流地点を見る サポート5名
- ・ 2月14日(火) 1~4校時
「野川の源流を調べる」一国分寺・真姿の池へ サポート5名
- ・ 3月20日(月) 3,4校時

「野川学習まとめ発表」 1名見学

- * 年間のテーマを「野川全域踏破」とし、学校に近いところから始まり、上・下流かなりの部分の野川に行くことができた。特に野川と多摩川の合流地点、国分寺の野川源流見学は有意義であった。
- * 最後のまとめ発表も、自分の決めたテーマでグループを作り、しっかりとまとめていて感心した。3年生と保護者に対して発表するので、クイズにしたり、紙芝居のようにしたり色々工夫していた。まとめ学習に関れなかったのが残念だった。

調布市立布田小学校 1年生（72名） 多摩川学習（生活科）

- ・ 9月29日（木）3,4校時
「虫探しと草花あそび」 サポート7名

調布市立布田小学校 4年生（58名） 多摩川学習（総合的な学習の時間）

- ・ 10月12日（水）3,4校時
「多摩川観察―鳥・石・虫・植物」 サポート7名
- ・ 11月11日（金）3,4校時
「多摩川観察―鳥・石・虫・植物―Ⅱ」 サポート6名
- ・ 12月21日（水）3,4校時
「テーマを決めてまとめる」3,4校時 教室 サポート7名
- ・ 2月10日（金）5校時

環境教育研究授業

- 「多摩川で鳥と石を調べる」 サポート8名
- * 4年生は、サポートの依頼がきたのが10月だったため、多摩川でできることが限られていたことが残念だった。
- * 最後に子どもたちが活動のまとめをつくる教室での授業にも関れたことは、私たちの活動の振り返りにもなり、非常によかった。
- * 子どもたちから、お礼の手紙をテーマごとにまとめて送られたことが嬉しかった。

調布市立第三小学校 3年生（77名） 多摩川学習（総合的な学習の時間）

- ・ 9月27日（火）5,6校時
「多摩川探検、テーマを見つけよう！」 サポート5名
- ・ 10月5日（水）5校時
「多摩川探検―虫・鳥・石」 サポート5名
- ・ 10月25日（火）5,6校時
「多摩川探検―虫・鳥・石」 サポート5名

- ・ 11月24日（木）20分休み

「多摩川新聞」－多摩川学習のまとめ 2名で見学

* 多摩川での学習を新聞にまとめたものを見学したが、実際の多摩川でテーマにしていたことと、まとめたことが全然違う子が多くいて、多摩川に行って学習したことは何だったのかと愕然とした。まとめ学習にも関れば、もう少し違う結果が出たのではないかと残念な思いが残った。

イ. 課題

1. 学校側の活動の継続

せっかく多摩川や野川で素晴らしい活動ができて、それが学校の中で情報として伝えられていない様で、活動が単年度で終わり学習内容の引継ぎが行われていないため、戸惑うことがあった。

私たちの学習支援活動が、学校との関係より先生との個人的な繋がりになっていることが原因の一つとも考えられ、今後学校との関係をどう作っていくかが課題といえる。

一方で、校長先生が積極的に学校に市民支援を受け入れたいと私たちの活動を先生方に話して、幾つかの学年でサポートを行うことになった学校もあった。

2. 道具類の確保

私たちが揃えた道具や器具類があったことで、活動の幅が広がったことは事実であるが、まだ足りないものもある。本来であれば学校が揃えられれば一番よいと考えるが、学校も予算が限られていて思うようにならない。ライフジャケットなどは必要不可欠であり、多摩川で子どもたちを川の中に入れた時は、子どもの水辺サポートセンターから借用したが費用がかかり大変であった。今後、教育委員会などへの働きかけも必要かと考える。

3. 活動の記録

多くの学校に私たちの活動を知ってもらい、学習支援を進めていくためには、自分たちの活動を写真で残しておくことは必要であるが、サポート時に記録係りの人員が確保できず、記録写真を撮ることがほとんど出来なかった。自分たちの活動の確認にもなることなので、今後は出来るだけ記録写真を残すようにしたい。

③ネットワークと協力体制づくり

ア. 活動実績

* 講師の派遣

多摩川での様々な活動を行っている特定非営利活動法人多摩川センターに多くを依頼したが、他には市内の活動団体との関係が作れるようになり、その人脈を活用することができた。

* 調布市の支援体制

環境市民懇談会、子どもエコクラブ、環境フェアなど調布市は環境保全やそれに関した団体の活動を支援することを積極的に行っている。他にも、雑木林塾、環境モニター、人間樹林の会、かに山の会など、市が市民を育て自主活動グループを作る後押しをして、市民の環境活動グループが増えている。私たちが市のいくつかの活動に関することで、市からの支援の体制が固まり、学校から市の環境保全課に環境学習支援の依頼があると私たちのグループを紹介してもらえるようになったことは、おおいに励みとなった。

* その他のネットワーク

【やあやあドリームオールスターズ子どもあそび博覧会】

調布市で総合的な学習の時間に、出前講座や学習サポートなどに関する活動団体・グループが集まり活動見本市を開催した。会場が学習支援を行っている富士見台小学校であったので、私たちが参加し、多くの先生方に我々の活動を知ってもらうことが出来た。その結果、環境学習支援の依頼があり、また他団体とのネットワークが作れた。

【調布たまがわフェスタ2004】

調布青年会議所が主催し、多摩川の中と河川敷を使って子どもたちに多摩川を楽しんでもらおうというイベントに参加。青年会議所ほか多摩川で活動する団体と繋がりを持つことができた。

【東京都小中学校環境教育研究会】

調布市立布田小学校で開催され、研究授業の手伝いをし私たちの活動が紹介され、その後の活動が広がった。

イ. 課題

学校の環境学習支援だけに留まらず、他団体との交流活動などを広げたことで自分たちのネットワークは広がったが、2年間では目指すネットワーク作りまではいかなかった。

市民活動のネットワークを作ることで、学校が求める幅広い学習支援に対しても対応できるようになり、それぞれの団体・グループが不足している部分を、お互いに補完し合い、層の厚い活動に広げていくことができると考える。

今後、しっかりとした学校支援体制にしていくために、市民のネットワークをどの様に作っていくかが課題といえる。

6. 学習プログラムづくり

2年間学校支援活動をする中で、多摩川や野川での活動について、子どもたちの要求は多種・多様で、また先生方も子どもたちの要望を聞きながらどうまとめるか、悩みながら活動を組み立てている。分かりやすいプログラムカードがあれば今後の活動に役立つと考えるが、すべてをカードにするのは難しい。これまでの活動の中からあると良いと思ういくつかのテーマをプログラムカードとして考えてみた。

[多摩川の石を使って魚の絵を描こう]

- ・ 用意するもの一画用紙
 - ・ 5～6人のグループで行う。
 - ① 画用紙に魚の輪郭だけ描いて、河原に行く。
 - ② 河原に着いたら、色や形の違う石を集める。
 - ③ 画用紙を置いて、その上に石を並べ魚の形に作っていく。
 - ④ 背中と腹の色の違いや、ヒレの形の違いなども気を付けて合う石を探しながら、魚を作る。
 - ⑤ 完成したら、指導者が写真などに記録し、教室に帰ってからそれぞれのグループの作品をみんなで見ると見る。
- * 画用紙に魚の絵を描く時に、何の魚か、どんな特徴があるかなどを調べてから描くとよい。魚にも興味が湧くし、石の色や形の違いにも気づく。

[多摩川の河原で食べられる植物を探そう]

- ・ 用意するものビニール袋、スコップ、軍手

- ・ グループで行動するほうが、安全確認がしやすい。
- ・ 季節は、春、冬

* 春編

- ① ヨモギ、イタドリの新芽、シロツメクサの花、カラスノエンドウ、ノビルなどが食べられる。ノビル以外は天ぷらにするのが良い。ヨモギは草団子が作れる。
- ② 時期が多少ずれるので、事前に確認しておくことが必要。

* 冬編

- ① キクイモを探して、掘り出す。
- ② 茹でたり、油炒めして食べる。
- ③ 根を抜いて回りにあるキクイモを掘り出すことが楽しいことを教える。
- ④ キクイモが植えられた歴史を調べることを教える。

*野川でも種類は減るが、実施できる。

「川の水質を調べよう」

- ・ 用意するもの—パックテスト（COD，PHなど）、クリーンメジャー、水温計、水を入れる容器（水のペットボトルなどが便利）
 - ・ 川の水だけでなく、比較する水—湧き水、雨水、生活排水なども用意するとよい。
 - ・ 4年生以上位からがよい。
- ① パックテストの説明をする。
 - ② グループになり、サポートが1~2名ずつ付いて、子どもたちにやらせる。
 - ③ できればパックは人数分用意し、全員が体験できるようにするとよい。
 - ④ 計測時間を待つ間に、川の水質がどの位か考えさせる。
 - ⑤ クリーンメジャーも、透視度がどの位か想像させてから見る様にするとうい。
 - ⑥ 川の水がどの位汚れているか、まず子どもたちに考えさせてから行うことが大事。

「川でガサガサをしよう」

- ・ 用意するもの—手網、バケツ・バットなど魚や水生生物を入れる容器
- ・ 裸足やサンダルでは川に入らない。必ず靴を履く。古い靴下を靴にかぶせると滑らない。
- ・ 膝下までの水深の所がよい。場所によってはライフジャケットをつける。
- ・ 事前と当日の下見を必ず行う。

- ① 手網を持って川に入り、草の下などに網を入れる。足でガサガサと水を網に入れるようにすると生き物が捕まりやすい。
- ② 流れに向かって網を入れる。足で石を動かすとよい。
- ③ 子どもたちは夢中になると、深い所にも行ってしまうので、監視体制をしっかりとる。
 - * 多摩川は水深の浅い所が少ないので、事前によく場所を選ぶこと。
 - * 野川は入れる所が多い。

7. まとめ

2年間の活動を振り返ると、まず授業のサポートに先生以外の外部の人間が関ることは、子どもたちによい刺激を与えることができたように思う。また先生方も、子どもたちへの学習の幅を広げることができたのではないだろうか。学校が私たちのような市民による学校支援のシステムが作られることを待っていたことを、2年間の活動を通じて強く感じた。

また学校では手網、パックテスト、クリーンメジャー、捕虫網などの道具類がほとんどなく、私たちが道具を揃えたことで子どもたちに十分な活動を提供できたと感じることは、決して自己満足ではないと考える。

自然環境学習は野外で子どもたちに色々な体験をさせることが大切であるが、なかなか学校の人手だけでは安全確保などの問題もあり、実施することが困難で、実施に踏み切れていない学校も多いのが現状である。今後、市民による安全管理も含めた支援のシステムが確立されれば、自然環境学習、特に多摩川や野川での学習活動が増えていくことは間違いないと思われる。

今後は他団体との協力体制を作りながら、自身のメンバーをもっと増やし、また専門的な知識も習得し、支援のシステムのネットワーク化を実現させていきたいと考えている。そうすることが調布市の素晴らしい環境素材である多摩川と野川を活かした自然環境学習を多くの子どもたちに体験させることができるものと信じる。

8. 最後に

多摩川や野川が好きで、その自然の素晴らしさを子どもたちが体験を通して実感して欲しいという思いで、環境学習支援の活動を始めた私たちですが、熱意はあっても、道具も器具も無い状態でした。とうきゅう環境浄化財団の助成を受けられたことにより学校支援に必要な道具を揃えることができ活動を進

めることができました。また調布市環境保全課には、会議室の手配やサポートが手薄の時にご支援を頂きました。特定非営利活動法人多摩川センターには勉強会の講師や学校サポートの講師、日常の活動についてのアドバイスなど頂きました。本稿を終えるにあたり、常に暖かく私たちの活動を見守って頂いた皆様に感謝申し上げます。有難うございました。

写真集

サポート活動の様子





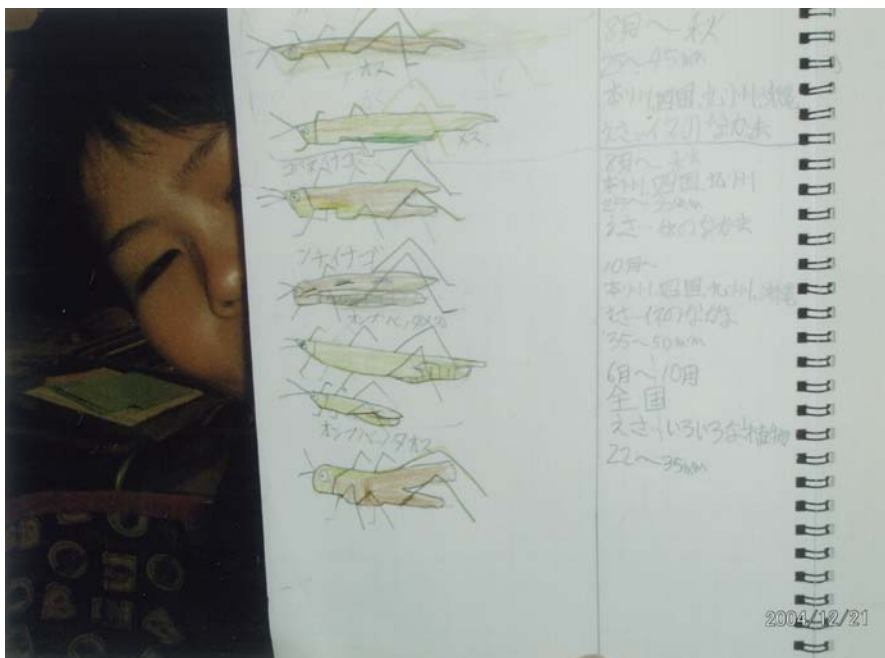












参考文献

- 品田 穰・海野和男 2002 学力を高める「総合学習の手引き」(株)海遊社
「多摩川の石」編集委員会 2003 地学ハンドブックシリーズ 15 河原の石のしらべ方
「多摩川の石」地学団体研究会
- 千葉とき子・斉藤靖二 1996 かわらの小石の図鑑—日本列島の生き立ちを考える
東海大学出版会
- 山溪ハンディ図鑑 1 野に咲く花 1989 (株)山と溪谷社
- 叶内拓哉ポケット図鑑日本の鳥 2005 (株)文一総合出版
- 野鳥観察ハンディ図鑑新水辺の鳥 1998 財団法人日本野鳥の会
- 野鳥観察ハンディ図鑑新山野の鳥 1998 財団法人日本野鳥の会
- 水辺を歩こう多摩川ガイド&ハンドブック 2004 国土交通省京浜河川事務所
- 村松 昭 野川散策絵巻 2001 アトリエ77
- てくてくMAP野川 2000 東京都建設局北多摩南部建設事務所
- 子どものための調布の歴史第二版 2001 調布市立図書館
- 総合的な学習の時間に対応する地域プログラム等作成事業「環境学習資源調査報告書」
2004 調布市環境部環境保全課
- 内田哲夫・倉持武彦・君塚芳輝. 2002. 環境教育、特にフィールドマナーの視点から捉えた多摩川の保全に関する研究 (研究助成・一般研究VOL. 24-No. 132), pp1-29. 財団法人とうきゅう環境浄化財団.

「^たま^がわ^ちゆ^うり^ゆう^いき ^みず^かん^きょう ^だい^ざい
多摩川中流域の水環境を題材としたプログラム

^かい^はつ ^しみ^ん ^がっ^こう^しえ^んたい^せい ^けん^きゆう
開発と市民による学校支援体制システムの研究」

(研究助成・一般研究 VOL. 28-NO. 165)

著者 ^{すぎ}や^ま ^のり^こ
杉山 典子

発行日 2007年3月31日

発行者 財団法人 とうきゅう環境浄化財団

〒150-0002

東京都渋谷区渋谷1-16-14 (渋谷地下鉄ビル内)

TEL (03) 3400-9142

FAX (03) 3400-9141